

中国辺境地域で胎動する経済ダイナミズム

海外情報室研究員 パートル

▶ はじめに

中国の沿海地域は、高成長を続ける中国経済のけん引役として内外の注目を浴びてから久しい。一方、これらの地域と対極的に位置する辺境地域は、外資の進出が少なく、港湾もなく発展から取り残された。地域発展の不均衡と個人の所得格差に加え、昨今国際的な関心を集めたチベット問題に見られる少数民族問題も看過できない。中国政府は、これらの問題を解消すべく、「西部大開発」や「東北振興」、「広西北部湾経済区発展計画」といった国家級プロジェクトを相次いで打ち出し、同地域へ外資を誘致する優遇策を講じている。

近年、これら辺境地域においては、陸続きで多くの国と国境を接している地理的な優位性を活かし、経済発展する隣国との交易を活発化させており、いわば「辺境経済圏」の様相を呈したヒト、モノ、カネの大きなダイナミズムをもたらしている。

本報告は、上述の中国辺境地域を以下4経済圏に分け、それぞれが持つ地政学的重要性を念頭に置き、その特徴と動向について概観する。

「北東アジア経済圏」 中国東北部（内モンゴル自治区東部、黒竜江、吉林、遼寧の東北3省）とロシア連邦（沿海地方、ハバロフスク地方、ユダヤ自治州、アムール州、チタ州）およびモンゴル東部を含む地域を指す。

「新シルクロード経済圏」 中国西北部（新疆ウイグル自治区、寧夏回族自治区）と中央アジア、ロシア連邦（アルタイ共和国）およびモンゴル西部を指す。

「グレーターメコン経済圏」 中国西南部（雲南省、広西チワン族自治区）とインドシナ半島を指す。

「ヒマラヤ経済圏」 中国南西部（チベット自治区）とインド、ネパールを指す。

なお、地域ごとの詳細な報告は現地調査を踏まえ日をあらためて行いたい。

▶ 「辺境経済圏」の諸相

中国の辺境地域は、歴史的に漢文化とは民族をはじめ言語や文化、宗教など多くの面で異なっており、今日でも国境を隔てて歴史や文化を共有する同種同族が周辺国に点在している。とりわけ、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区、広西チワン族自治区は、そうした特長が強く、中国の政治、経済システムに組み込まれながらも教育や文化、そして対外貿易等の面で自治権が賦与されている。

中国は、自国経済の持続的な発展に欠かせないエネルギー、

鉱物資源の確保と安定供給を求め、中央アジアを含む周辺国との間で二国間関係の強化だけにとどまらず、包括的な多国間協力組織たる「上海協力機構（SCO）」などを通じて影響力を強めている。同時に、周辺国・地域との経済交流を深める上で辺境地域をゲートウェーとして位置付けていることから、ユーラシアの中核地帯に位置する上述の「辺境経済圏」の動向を把握することは、当該地域をめぐる国際政治や経済状況を認識する一つの重要なパラメーターになるであろう。

なお、「辺境経済圏」の主要経済指標は図表1を、貿易額の推移は図表2を参照されたい。

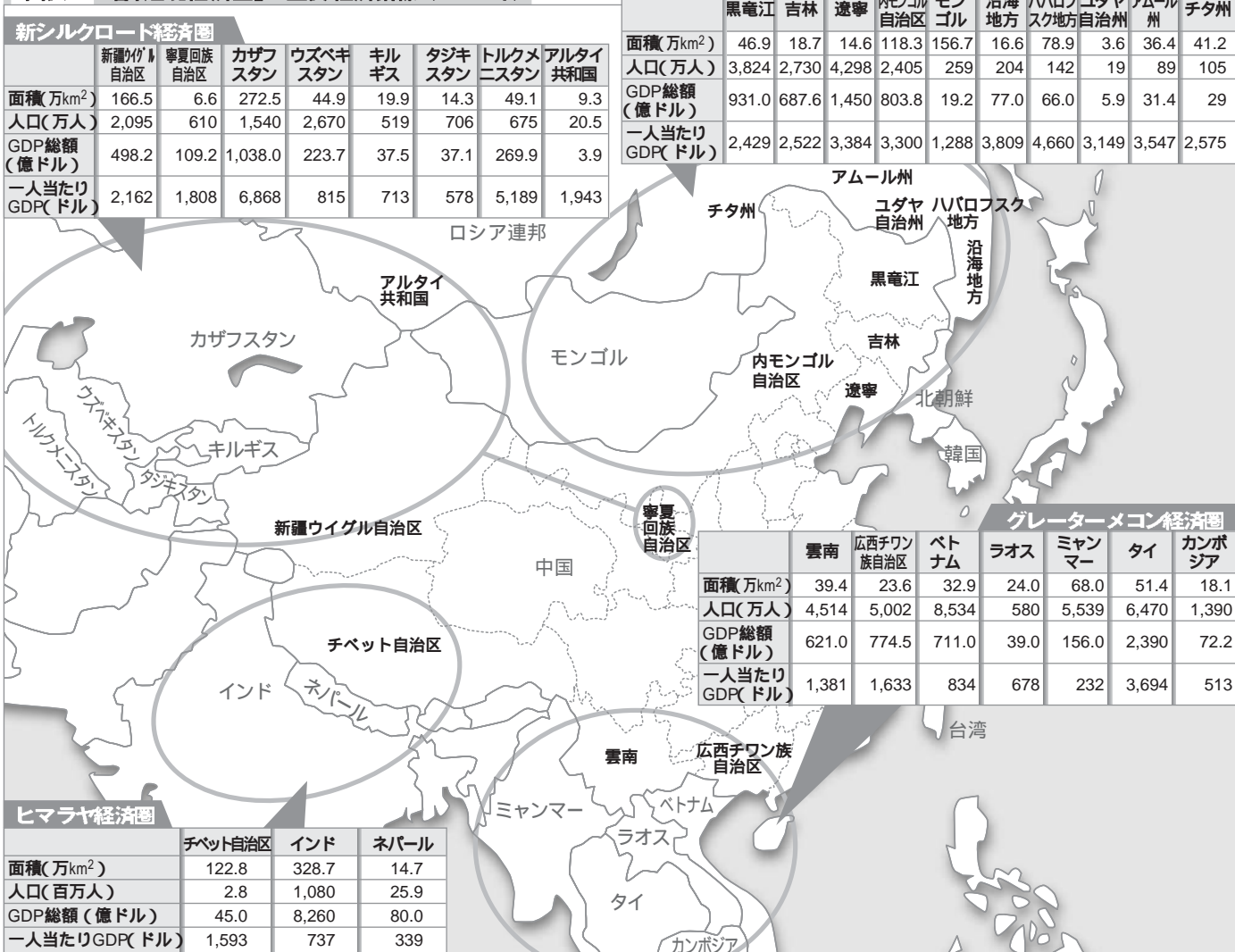
「北東アジア経済圏」

北東アジア地域において、中国は「東北振興」プロジェクトの推進によって「北東アジア経済圏」とリンクさせる構想を描いているが、ロシアは極東・シベリアの地域振興の観点からアジアとの経済関係を強化しようという姿勢を見せており、一方日本は環日本海経済圏という構想を持つ。こうした中で中国の辺境地域に関しては、5年連続GDP成長率で全国トップを維持する内モンゴル自治区は注目に値する。同自治区の東部は、エネルギーなどの資源供給基地として「東北振興」プロジェクトに新たに加えられ、西部は、「西部大開発」プロジェクトに組み込まれており、企業進出には税制面での優遇策が講じられるなど利点が多い。近年、石炭など豊富な地下資源に加え、4,200kmに及ぶ長い国境線を持つ地理的利点から、モンゴル、ロシア連邦との貿易やヒトの往来をはじめとする経済交流が拡大傾向にあり、今後資源（鉱物・食料）や物流面（鉄道）での成長の可能性は大きい。2007年の中国とロシア、モンゴル両国との貿易総額は2000年比で5倍増となっている。

「新シルクロード経済圏」

新疆ウイグル自治区と中央アジア諸国は、ユーラシア大陸の中核地帯に位置し、古くから「シルクロード」と呼ばれる東西交流網によって貿易をはじめ、さまざまな人種や民族が行き来する異文化交流の盛んな地域でもあった。近年、同地域を中心に新たに「新シルクロード」の構築が多国間の協力のもとで進められており、特に経済交流が活発化している。同地域は、「イスラム」という共通項があり、将来的には中国の新疆や寧夏回族自治区から中央アジア諸国、さらにはパキスタンなど南アジアの国々へ広がる広域ビジネスのネットワークが形成される可能性もあろう。2007年の中国と中央アジア5カ国の貿易総額は2000年比で10倍近く増えている。

図表1 各「辺境経済圏」の主要経済指標 (2007年)



注：ロシア連邦（シベリア・極東連邦管区）とカンボジア、ネパールは2006年値。ミャンマーは05年値（ただし、一人当たりGDPは06年値）。ラオス、ベトナム、タイの人口は06年値。また、人民元の米ドル換算時のレートは期中平均値（1ドル=7.6元）を使用
出所：日本外務省、ジェトロ、ロシアNIS貿易会、中国の統計資料を基に戦略研究所作成

「グレートメコン経済圏」

アジア開発銀行（ADB）が、1992年から始動したメコン川流域の関係国・地域（カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイ、中国の雲南省、広西チワン族自治区）のインフラ開発や貿易および人的交流を支援する「大メコン流域地域協力プログラム（GMS）」は、近年成果を挙げつつある。同地域では現在、開通した「南北回廊」（雲南省 ラオス タイ、1,800km）をはじめ、ミャンマー、タイ、ラオス、ベトナムを横断する「東西回廊（1,450km）」に加え、将来の開通が期待されているアジア縦断鉄道建設（中国 シンガポール）などによって、域内の貿易や流通および人的往来が大きな地殻変動を起こしつつある。2007年の中国、GMS諸国の貿易総額は2000年比で4倍以上増加。

「ヒマラヤ経済圏」

チベットとインド、ネパールは、仏教のルーツとして歴史的に交流が盛んだった。チベットでは、2006年の青蔵鉄道の開通を機に道路や隣国との貿易ゲート等のインフラ整備が進められ、宗教を介して共有する文化的な背景のもと国境貿易と観光でに

ざわりを見せている。中印国境貿易は44年ぶりに再開され、中国とネパールを結ぶ国際道路建設は2010年の開通を目指し急ピッチで進められており、今後経済交流面での大きな進展が期待されている。2007年の中国とインド、ネパール両国との貿易総額は2000年比で11倍以上増えている。

図表2 中国と周辺国との貿易額の推移 (単位: 百万ドル)

	2000年	01年	02年	03年	04年	05年	06年	07年
ロシア連邦	8,003	10,671	11,927	15,758	21,226	29,101	33,387	48,165
モンゴル	323	362	363	440	694	860	1,581	2,030
カザフスタン	1,557	1,288	1,955	3,292	4,498	6,806	8,358	13,875
キルギス	178	119	202	314	602	972	2,226	3,779
ウズベキスタン	51	58	132	347	576	681	972	1,129
タジキスタン	17	11	12	39	69	158	324	524
トルクメニスタン	16	33	88	83	98	110	179	353
ベトナム	2,466	2,815	3,264	4,639	6,742	8,197	9,949	15,115
ラオス	41	62	64	109	114	129	218	262
タイ	6,624	7,050	8,557	12,655	17,342	21,811	27,726	34,639
ミャンマー	621	632	862	1,080	1,145	1,209	1,460	2,062
カンボジア	224	240	276	321	482	563	733	933
インド	2,914	3,596	4,945	7,595	13,614	18,701	24,859	38,647
ネパール	204	153	110	127	171	196	268	400
合計総額	23,240	27,091	32,758	46,799	67,373	89,494	112,240	161,913

出所：中国商務部統計資料を基に戦略研究所作成